

生徒への健康意識調査を介した学校薬剤師のあり方の検討

井上 裕*¹ 三宅恵美子¹ 村田 勇¹ 山崎 康之²
 高橋直三郎² 鯉淵 肇² 金本 郁男¹
 城西大学薬学部医薬品安全性学講座¹, 越谷市薬剤師会²

(受付：2013年7月22日 受理：2013年10月18日)

要 旨：埼玉県越谷市内の小学生1617名(5, 6年生), 中学生328名(2年生)を対象とし, 生徒の健康意識の実態(健康食品, サプリメント, たばこ, お酒, 脱法ドラッグ, 薬の適正使用に関する学校薬剤師の関与)を把握することにより, 今後の学校薬剤師の活動のあり方を示唆することを目的とした。アンケートは無記名方式において実施した。健康食品・サプリメントの認知度については小学生87.3%, 中学生93.7%であったが, 摂取率については小学生52.9%, 中学生40.4%であった。脱法ドラッグについての健康被害の認知度は63.4%, 中学生87.8%であった。以上のことから, 今後の薬剤師の活動として, 健康食品やサプリメントについての知識や正しい使い方を伝える「薬育」の推進が必要だと考える。学校薬剤師の活動を世間に広め, 継続的に実施することで, 薬剤師の職能の可能性を大きく上げると確信する。

キーワード：学校薬剤師, 健康食品, 脱法ドラッグ, アンケート

緒 言

わが国では, 学校保健に基づき, 薬剤師という専門家の視点から学校保健活動に参画して提案や助言を与える学校薬剤師という職務がある¹⁾。学校保健とは学校保健安全法の下に行われる保健活動である。児童生徒および教職員の健康管理だけでなく, 学校における保健教育も学校薬剤師の任務とし²⁾, 平成22年4月1日から, 「学校保健安全法」が改正され, 学校における安全管理に関する条項が加えられた。その内容は, 学校医, 学校歯科医および学校薬剤師の職務執行の準則に「保健指導に従事すること」を追加, 学校薬剤師の職務執行は「健康相談に従事すること」を追加する大改正が行われ³⁾, 学校医, 学校歯科医と並び, 学校薬剤師も積極的に参画するものと再整理された。

近年, 薬物乱用の低年齢化⁴⁾や未成年の飲酒・喫煙⁵⁾, 1人で食事をする孤食の増加⁶⁾に伴う食生活の乱れによる

子どもの生活習慣病の増加, また, 性の逸脱行動などの生活習慣の乱れ⁷⁾が問題視されている。また, インターネットの急速な普及により, 誰でも簡便に自由に情報を手に入れることが可能となった⁸⁾。情報発信やウェブの閲覧は誰もが容易にできるため, 有害情報も混在し, 子供にとって悪影響をもたらすものも少なくない⁹⁾。小学生や中学生には, 情報の正確さを判断する能力が求められるものと考えられる¹⁰⁾。教育の場では平成24年度から新しい学習指導要領として, 保健体育の科目の中に「薬の正しい使い方」が追加された¹¹⁾。近年のセルフメディケーションによるOTC薬や健康食品利用の低年齢化を受け, 薬育の推進として, 医薬品への正しい知識を身につけ, 薬やサプリメントが心身に与える影響を理解し, 同時に, 喫煙・飲酒, 薬物乱用防止へ学校薬剤師の職能を発揮することが求められている^{12, 13)}。セルフメディケーションは正確な知識をつけることで実践でき, 幼少期より学校や家庭で教育を受ける必要がある。子供を守るた

*〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1 Tel: 049-271-7317 E-mail: yinoue@josai.ac.jp

めには、学校薬剤師が保護者にも正しい知識を伝え、喫煙、飲酒、薬物乱用、また医薬品についての正しい情報を子供と共有することが大切であり、結果として、セルフメディケーションへとつながると考える。このような学校教育に大きく関係し、薬育への貢献が求められているのが学校薬剤師である¹⁴⁾。学校薬剤師の職務は、委嘱されている学校の依頼に応じて、教室の二酸化炭素濃度、照度、給食室の環境、水泳プールや飲料水などの定期的な環境衛生検査、喫煙防止教育、アルコールに関する指導、薬物乱用防止教育などの講義や教職員とのチームティーチングなどを行っている³⁾。学校保健法が平成20年に学校保健安全法に改正されたことにより、学校薬剤師は学校保健教員として相関を持ち、その責任も大きい¹⁵⁾。

しかしながら、薬育の健康に対する意識の向上に向けた啓発活動が、1)本当に伝わっているのか、2)知識となっているのか、3)日常生活に反映しているのか、4)薬育としての礎を成しているのかを調査した事例はなく、学校薬剤師側の一方通行になっている可能性も否めない。

そこで本研究では、小学生、中学生、高校生を対象に、健康食品やサプリメント、たばこ、お酒、脱法ドラッグについてのアンケート調査を行い、健康への意識の実態を把握し、今後の学校薬剤師の活動のあり方を検討した。

対象および方法

今回の調査研究は平成24年7月から12月までの期間に実施された。アンケート調査の対象は埼玉県越谷市内の小学校と中学校の協力を得て、越谷市内の小学生(5, 6年生; 1617名, 男子生徒855名, 女子生徒762名), 中学生(2年生; 328名, 男子生徒154名, 女子生徒174名)を対象にアンケート調査を行った(Table 1)。本調査の目的と内容について十分な説明を行い、同意が得られた小・中学生本人1945名にアンケートを、無記名・自記式にて実施した。アンケート内容をFig. 1に示す。回答は1945名の小・中学生から得られ、回収率は100%であった。統計解析についてはt-testを用いて行った。なお、本研究は城西大学倫理委員会承認されており、生徒および教育委員会に趣旨を説明し同意を得た上で行った。

結 果

健康食品およびサプリメントに関する質問事項の結果をTable 1に示す。“健康食品、またはサプリメントという言葉を知っていますか”の質問に対する結果より、「両方知っている」小学生55.7%、中学生78.7%であった。「健康食品は知っている」小学生26.9%、中学生10.7%、「サプリメントは知っている」小学生4.7%、中学生4.3%であった(Table 1 質問1)。次に、健康食品やサプリメントを知っていると回答した生徒に対し、“普段から健康食品またはサプリメントを食べたり飲んだりしていますか”という質問を行った(質問2)。その結果、「はい」小学生52.9%、中学生40.4%であった。“普段から健康食品、サプリメントを摂取していると答えた方に質問です。きっかけはなぜですか”の質問に対する結果を示す(質問3)。その結果、「自分で必要だと思った」小学生169人、中学生30人であり、「親に言われた」小学生363人、中学生67人であった。自由意見として、小学生は「おいしそう」や「家にあった」、中学生は「おいしかったから」、「監督やコーチに勧められた」などの回答があった(質問4)。質問5に“普段から健康食品、サプリメントを摂取していると答えた方に質問です。食べたり飲んだりするときに誰かに相談しましたか”の質問に対する結果を示す。その結果、「相談はしていない」小学生428人、中学生75人であり、「親」小学生286人、中学生48人であった。

たばこおよびお酒に関する回答結果をTable 2に示す。質問6の、“タバコの健康被害について知っていますか”の結果より、「知っている」小学生90.0%、中学生98.5%であり、「知らない」小学生5.5%、中学生0.6%であった。次に、“お酒の健康被害について知っていますか”という質問を行った(質問7)。その結果、「知っている」小学生74.6%、中学生97.3%であり、「知らない」小学生16.1%、中学生1.5%であった。

脱法ドラッグに関する回答結果をTable 3に示す。“脱法ドラッグは危険だということを知っていますか”の質問の結果、「はい」小学生63.4%、中学生87.8%であり、「いいえ」小学生35.6%、中学生12.2%であった(質問8)。次に、“脱法ドラッグによる健康被害について、今までに学校で習ったり、家庭で教わったりしたことがありますか?”という質問を行った(質問9)。その結果、「はい」小学生35.2%、中学生65.2%であり、「いいえ」小学生

Table 1 健康食品およびサプリメントに関する質問事項

質問 1 「健康食品」、または「サプリメント」という言葉を知っていますか？		
	小学生 (n=1617)	中学生 (n=328)
両方知っている	55.7% (n=901)	78.7% (n=258)
「健康食品」は知っている	26.9% (n=435)	10.7% (n=35)
「サプリメント」は知っている	4.7% (n=76)	4.3% (n=14)
両方知らない	12.7% (n=205)	6.4% (n=21)

質問 2 健康食品、サプリメントを知っていると回答した方に質問です。普段から健康食品またはサプリメントを食べたり飲んだりしていますか？		
	小学生 (n=1412)	中学生 (n=307)
はい	52.9% (n=747)	40.4% (n=124)
いいえ	46.9% (n=662)	59.6% (n=183)
無回答	0.2% (n=3)	0.0% (n=0)

質問 3 普段から健康食品、サプリメントを摂取していると答えた方に質問です。きっかけはなぜですか？（複数回答）		
	小学生 (n=747)	中学生 (n=124)
自分で必要だと思った	20.4% (n=169)	21.9% (n=30)
親に言われた	43.8% (n=363)	48.9% (n=67)
友達に紹介された	1.4% (n=12)	1.5% (n=2)
その他	24.9% (n=206)	18.2% (n=25)
無回答	9.5% (n=79)	9.5% (n=13)

質問 4 質問 3 で「その他」と答えた方に質問です。きっかけはなぜですか？（自由回答）	
小学生	中学生
おいしそう	おいしそう
家、冷蔵庫にあった	家にあった
ヤクルトが甘くておいしい	ヤクルトは美味しい
自分から選択した	親が買ってきた
健康だと思うから	おばあちゃんにすすめられた
普通に、なんとなく飲んでいる	監督、コーチ

質問 5 普段から健康食品、サプリメントを摂取していると答えた方に質問です。食べたりに飲んだりするときに誰かに相談しましたか？（複数回答可）		
	小学生 (n=747)	中学生 (n=124)
親	36.8% (n=286)	38.4% (n=48)
兄弟	3.0% (n=23)	0.8% (n=1)
友達	1.3% (n=10)	0.0% (n=0)
担任の先生	0.2% (n=2)	0.0% (n=0)
保健室の先生	0.4% (n=3)	0.0% (n=0)
その他	1.1% (n=9)	0.8% (n=1)
相談はしていない	55.0% (n=428)	60.0% (n=75)
無回答	2.2% (n=17)	0.0% (n=0)

せいと せいかつかんきょう および けんこう かん
生徒の生活環境および健康に関するアンケート

か き 下記の Q1～Q11 の 当てはまるもの の 番号を 1 つ ○ で 印をつけてください。 なお、 ふくすうかいとう か
ばい ふくすう かま の場合は複数でも構いません。

① 性別を教えてください
② 学年を教えてください

けんこうしょくひん しつもん
健康食品, サプリメントについて質問です。

Q1 「健康食品」または「サプリメント」を知っていますか？
Q2 健康食品, サプリメントを知っていると回答した方に質問です。
普段から *健康食品やサプリメントを食べたり飲んだりしていますか？
*健康食品…青汁 (例えば, ヤクルト, ブルガリア飲むヨーグルトなど)
サプリメント…ビタミン剤など

Q3 Q2 で「はい」と答えた方に質問です。きっかけは何ですか？ (複数回答可)
Q4 Q3 で「その他」と答えた方に質問です。きっかけは何ですか？ (自由回答)
Q5 Q2 で「はい」と答えた方に質問です。食べたり飲んだりするときに誰かに相談しましたか？
(複数回答可複数回答可)

たばこ お酒について質問です。

Q6 タバコの健康被害について知っていますか？
Q7 お酒の健康被害について知っていますか？

だっぽう しつもん
脱法ドラッグについて質問です。

Q8 脱法ドラッグは危険だということを知っていますか？
Q9 脱法ドラッグによる健康被害について、今までに学校で習ったり、家庭で教えてもらった
りしたことがありますか？

がっこうやくざい しつもん
学校薬剤師について質問です。

Q10 学校薬剤師を知っていますか？
Q11 Q10 で「はい」と答えた方に質問です。何で知りましたか？

ぜんいん しつもん
全員に質問です。もしも学校で薬剤師が授業するとしたら、どんな授業を聞きたいと思いま
か(してほしいですか)？
()

Fig. 1 アンケート項目

40.0%, 中学生 16.5%, そして、「わからない」小学生 23.7%, 中学生 18.3%であった。

学校薬剤師の認知度に関する回答結果を Table 4 に示す。“学校薬剤師という言葉を知っていますか”の質問の結果, 「はい」小学生 17.6%, 中学生 14.9%であり, 「いいえ」小学生 80.8%, 中学生 84.5%であった(質問 10)。

次に, 学校薬剤師という言葉を知っていると回答した生徒に対し, “何で知りましたか”という質問を行った。その結果, 「学校で作業しているのを見た」小学生

15.2%, 中学生 10.2%であり, 「学校で講演をしてくれた」小学生 2.1%, 中学生 16.3%, そして, 「見たことはないが聞いたことはある」小学生 77.0%, 中学生 67.4%であった(質問 11)。

考 察

今回の研究では, 小学生と中学生に対して, 健康食品, サプリメント, たばこ, お酒, 脱法ドラッグや学校薬剤師の認知度について現状を調査し, 興味深い結果が得

Table 2 たばこおよびお酒に関する質問事項

質問6 タバコの健康被害について知っていますか？		
	小学生 (n=1617)	中学生 (n=328)
知っている	90.0% (n=1456)	98.5% (n=323)
知らない	5.5% (n=89)	0.6% (n=2)
わからない	4.4% (n=70)	0.6% (n=2)
無回答	0.1% (n=2)	0.3% (n=1)

質問7 お酒の健康被害について知っていますか？		
	小学生 (n=1412)	中学生 (n=307)
知っている	74.6% (n=1206)	97.3% (n=319)
知らない	16.1% (n=260)	1.5% (n=5)
わからない	9.1% (n=147)	1.2% (n=4)
無回答	0.2% (n=4)	0.0% (n=0)

Table 3 脱法ドラッグに関する質問事項

質問8 脱法ドラッグは危険だということを知っていますか？		
	小学生 (n=1617)	中学生 (n=328)
はい	63.4% (n=1025)	87.8% (n=288)
いいえ	35.6% (n=575)	12.2% (n=40)
無回答	1.0% (n=17)	0.0% (n=0)

質問9 脱法ドラッグによる健康被害について、今までに学校で習ったり、家庭で教えてもらったりしたことがありますか？		
	小学生 (n=1412)	中学生 (n=307)
はい	35.2% (n=569)	65.2% (n=214)
いいえ	40.0% (n=646)	16.5% (n=54)
わからない	23.7% (n=384)	18.3% (n=60)
無回答	1.1% (n=18)	0.0% (n=0)

られた。

健康食品・サプリメントについての結果より、質問1で、健康食品およびサプリメントを「両方知っている」と回答した生徒が小学生から中学生になるにつれて増加が認められた($p<0.05$)。また、「健康食品は知っている」と回答した生徒が「サプリメントは知っている」と回答した生徒よりも多く、サプリメントよりも健康食品の方が親しみをもっていると思われる。この結果に対し、質問2の健康食品やサプリメントの摂取について、小学生から中学生になるにつれ減少する結果($p<0.05$)を示したことから、中学生では青年期前期による心理的離乳における心理的

自立による¹⁶⁾ものと考えられた。健康食品やサプリメントの摂取の小学生のきっかけは、保護者の影響を受けていると考えられた。自由意見より、「おいしそう」、「テレビで見た」という回答が得られたことから、テレビコマーシャルや雑誌などで魅力的な広告に影響を受けているものと推察した。質問5の健康食品やサプリメントの摂取に関しては、小中学生とも誰にも相談せずに摂取していることから、健康食品やサプリメントに関する危険意識が薄くなっていると思われる。

たばこの健康被害については小学生と中学生に広く認識されているが、お酒の健康被害については希薄な状況

Table 4 学校薬剤師に関する質問事項

質問 10 学校薬剤師という言葉を知っていますか？		
	小学生 (n=1617)	中学生 (n=328)
はい	17.6% (n=284)	14.9% (n=49)
いいえ	80.8% (n=1306)	84.5% (n=277)
無回答	1.6% (n=27)	0.6% (n=2)

質問 11 学校薬剤師という言葉を知っていると答えた方に質問です。何で知りましたか？		
	小学生 (n=283)	中学生 (n=49)
学校で作業しているのを見た	15.2% (n=43)	10.2% (n=5)
学校で講演をしてくれた	2.1% (n=6)	16.3% (n=8)
見たことはないが聞いたことはある	77.0% (n=218)	67.4% (n=33)
その他	5.3% (n=15)	2.0% (n=1)
無回答	0.4% (n=1)	4.1% (n=2)

が浮き彫りとなった($p<0.05$) (Table 2)。この理由の一つとして、学校薬剤師の講演会でお酒の健康被害を話す機会が少ないことが推察された。お酒の不適切飲用により死に至る場合もあり、急性アルコール中毒や臓器に対する悪影響を引き起こしやすいこと、また、大量に飲んだ場合、成人に比べてより臓器障害を引き起こやすく、アルコール依存症になりやすいことがあるなどが報告されている¹⁷⁾。そのため、成長期の体に起こす影響について未成年の生徒に正しい知識を伝えることは、必要な薬育になるものと考えられる。脱法ドラッグの危険性について十分に理解していない生徒もいることが認められた(質問8)。6割以上の小学生が脱法ドラッグの健康被害について学んだことがないことから、知識の伝達が不十分であると思われる。中学生は、学校薬剤師が薬物乱用防止教室などを開いて講演しているにもかかわらず、講演会の内容が理解されていない、または薬物乱用防止の講義の仕方が適切に行われていないため生徒に十分に伝わっていないなど学校薬剤師の一方通行の伝達講習会になっていることも考えられた。現在、脱法ドラッグのみならず脱法ハーブも社会問題化されており、薬剤師として薬物の危険性、誘惑に負けないような地域社会に貢献できるようなニーズに合わせた講義の改善が必要だと思われる。

最後に、学校薬剤師は、小学生、中学生とも、80%以上の生徒が学校薬剤師という言葉を知っていないことが示された。また、小中学生とも「見たことはないが聞い

たことはある」と回答しており、生徒との直接的な関わり、教職員や保護者との連携をとる機会を増やすなどをして薬剤師として学校教育に貢献することが今後の課題となる。

今回、小学生と中学生への健康意識調査を行った結果、それぞれ生徒の健康意識の現状の一端を明らかにできたとともに、質問9~11の結果から、学校薬剤師の活動を見つめ直す必要が見出されたと考えられる。学校薬剤師の活動を見直す具体策としては、学校関係者や保護者への説明会を積極的に行うことや、薬物乱用防止教室を生徒と保護者の参加型とし家庭で話し合う機会を設けるよう促すことが考えられる。また、学校薬剤師と生徒たちとの距離が遠いと感じるため、学校への訪問頻度を増やし、積極的に学校行事に参加したり、学校薬剤師が生徒の学校生活について興味を持つなどして学校関係者や生徒との信頼関係を築くことが必要だと思われる。この具体策の実現には、学校関係者との双方向な関係を築き、生徒たちの保健教育の重要性を共有するべきである。薬剤師は、薬学という科学を人々のために役立てるため、国家から託された職能人である¹⁸⁾。したがって、薬剤師は地域にとって町の科学者として存在していなければならない。

小中学生に必要な知識を提供することは新学習要領の「くすり教育」として追加された薬育である。これは約50年ぶりに学習要領として盛り込まれ、子どもたちの生きる力をはぐくむ具体的な手立てとして考えられた。寺町

らによると、中学生は、「自分の判断で薬を飲むことがある」15.4%であり¹⁹⁾、安楽らによると、小学生は、「サプリメントや栄養ドリンクを飲んだことがある」約90%であると報告されている¹³⁾。このことから、薬やサプリメントなど自分が健康に過ごすために必要とされる薬の存在が身近になってきているが、それらの正しい使い方については長い間指導は行われてこなかったのが現状である。子どもたちに正しい薬の使い方や知識を教える「薬育」を活性化することで、いざ薬を使うときに本当に必要な基本的な知識と判断力を持ち、より良いセルフメディケーションにつながると考えられる²⁰⁾。これは、地域密着型の医療の実現にも非常に重要なことと考える。

今後、セルフメディケーション意識を高めるためには、医薬品、健康食品やサプリメントなど、自分の健康をサポートする薬や嗜好品を使用する際に正しい知識と判断力を持ち合わせるための「薬育」の推進が必要であると考え、学校薬剤師による、たばこ、お酒や脱法ドラッグにおける健康被害についての薬物乱用防止講演の強化、脱法ドラッグは精神作用のみならず命に関わる危険性もあること、サプリメントの過剰摂取によって健康被害が生じる可能性があることなど、生徒と保護者に向けて正しい知識を伝える教育が期待される。今回は埼玉県内の一部の地域に限った調査を行ったが、子どもたちを中心とした地域のより良いセルフメディケーションにつながるよう、健康意識調査を続行していく予定である。

文 献

- Miyamoto N, Takahashi F, Fukushima N: History of the School Pharmacist System in Japan. *The Japanese Journal for History of Pharmacy* 2000; **35**: 224-226.
- 富士貞吉, 荻原郡次, 榎原栄一: 学校保健, 体育の科学社, 1965, 171p.
- 田中俊昭: 現代の学校保健 2011 II. 学校保健を支える専門職 3. 学校薬剤師の歴史と職務. *小児科臨床* 2011; **64**: 1269-1278.
- 田中俊昭, 谷口廣光: 学校薬剤師の役割—薬物乱用への対応—. *薬剤学* 2006; **66**: 401-404.
- 森 千鶴: 子どもの飲酒に影響する要因—中学生の親子実態調査から. *日社精医誌* 2012; **14**: 10-21.
- 林 文子, 海原康孝, 鈴木淳司, 香西克之: 小学1年生の食事の実態調査. *日歯福祉誌* 2009; **14**: 47-51.
- 丸井淑美, 橋本紀子: 中学生・高校生の交際及びそれに伴う恋愛行動とその背景要因との関連—埼玉県における調査をもとに—. *女子栄養大学紀要* 2010; **41**: 61-75.
- 上田達巳, 高井昌彰: 子どもの保護を目的としたインターネット利用監視支援システムの開発. *情報処理学会研究報告. CSEC[コンピュータセキュリティ]* 2006; **106**: 75-80.
- 木田正芳, 久保憲昭, 奥田宗義, 岡田幸明, 窪田義夫, 山崎敏彦, 金森市造: 児童・生徒の生活習慣, 運動習慣および口腔管理状態の調査. *スポーツ歯学* 2012; **15**: 65-69.
- 宮田 仁, 石原一彦: 小学生を対象とした情報モラル学習の試み—問題点を意図的に埋め込んだWeb教材の活用. *日本教育工学雑誌* 2001; **25**: 167-172.
- 宮本法子: キャンパスを出た「小学生に対する薬教育」. *薬学図書館* 2011; **56**: 210-215.
- 佐藤英治, 安楽 誠, 岡村信幸, 秦 季之, 吉富博則, 田口勝英, 村上信行: 福山市における地域住民と地域薬剤師のセルフメディケーション向上に関するニーズ調査. *Yakugaku Zasshi* 2011; **131**: 1117-1125.
- 安楽 誠, 富田久夫, 佐藤英治, 田淵紀彦, 吉富博則, 岡村信幸, 田口勝英, 近藤裕子, 村上信行: 学校薬剤師を介した小・中・高校生の一般用医薬品・健康食品の使用実態調査. *Yakugaku Zasshi* 2011; **131**: 835-842.
- 澤村良二: 地域保健と学校薬剤師(学校薬剤師の新しい役割). *ファルマシア* 1997; **33**: 1352.
- 山田純一, 高柳理早, 横山晴子, 鈴木康弘, 篠原智美, 山田安彦: 中学生を対象とした医薬品適正使用に関する意識調査と学校薬剤師による教育の効果. *Yakugaku Zasshi* 2012; **132**: 215-224.
- 大野木裕明: 女子青年からみた親子間の呼称と心理的離乳. *仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇* 2009; **54**: 53-61.
- 江藤和子, 橋本雄幸: 中学生の飲酒行動の実態と親子で学ぶ飲酒防止学習プログラムの提案—変化ステージモデルの活用—. *小児保健研究* 2012; **71**: 443-449.
- 永井恒司: 薬剤師は科学者である—科学を築いた薬剤師または薬局助手—. *薬剤学* 2004; **64**: 27-28.
- 寺町ひとみ, 太田拓希, 香田由美, 鬼頭英明, 駒田奈月, 志賀仁美, 田村顕人, 館 知也, 土屋照雄, 勝野真吾: 小・中・高校生の「医薬品の正しい使い方」に関する知識・意識および指導実施状況. *医療薬学* 2012; **38**: 767-779.
- 櫛田真由, 小谷 悠, 水野智博, 室崎千尋, 浅井玲名, 肥田裕丈, 平林 彩, 鶴飼麻由, 荻野由里恵, 後藤 綾, 山下加織, 松本友里恵, 毛利彰宏, 鍋島俊隆, 野田幸裕: 薬学生主導による児童向け出前くすり実験授業の有用性. *医療薬学* 2013; **39**: 10-17.

Examination of the Existence for the School Pharmacist through Survey on the Health Awareness to the Student

Yutaka Inoue¹, Emiko Miyake¹, Isamu Murata¹, Yasuyuki Yamazaki², Naosaburo Takahashi²,
Hajime Koibuchi², Ikuo Kanamoto¹

¹ Laboratory of Drug Safety Management, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Josai University

² Koshigaya Pharmaceutical Association

Key words: school pharmacist, health food, illegal drug, questionnaire

The purpose of this study was to suggest the best approach for future activities by school pharmacists, by surveying 1,617 primary school students (grades 5 and 6) and 328 junior high school students (grade 2) in Koshigaya-shi, Saitama to ascertain their health consciousness (involvement of school pharmacist in appropriate use of healthy foods, supplements, tobacco, alcohol, illegal drugs, and pharmaceuticals). The questionnaire was administered in an unsigned format. Although 87.3% of primary school students (PS), and 93.7% of junior high school students (JHS) recognized the importance of healthy food and supplement consumption, only 52.9% of PS and 40.4% of JHS actually consumed these items. Regarding illegal drug use, 63.4% of PS and 87.8% of JHS recognized that it may cause health impairments. For the above reasons, the author believes it is necessary to promote “pharma-education,” in which students are provided with knowledge and information on correct use of healthy foods and supplements, as a future activity of school pharmacists. The author is convinced that extending the activities of school pharmacists to a broader audience, and carrying out those activities continuously, will greatly expand the possibilities of pharmacists’ vocational abilities.

(J Community Pharm Pharm Sci 2014; 6: 49–56)